

高・大・一般 漢字（楷書A）

※楷書A、Bは段級をとわず両方出品も可。

見城 正訓

雁塔聖教序（褚遂良）②



※落款（署名）には「正訓」と記しています。「正訓」が臨書した、という意味になります。

雖愚不惑



——落款の記し方——

- ・臨書の場合は「〇〇臨」とします。
- ・他者の作った文・文章で、漢字のみの場合は「〇〇書」とします。
- ・自分の作った文・文章の場合は、「書」を省くことが多いです。
- ・右の「〇〇」には、自分の名（太郎・花子など）や雅号（雀人・清泉など）を記し、姓（鈴木・田中など）にはしません。

〈解説〉

先月に引き続き「雁塔聖教序」を取り上げます。この古典の持つ「軽快な趣」の習得を目指しましょう。

「雁塔聖教序」を書いた褚遂良は、初唐の三大家の一人です。欧陽詢と虞世南に比べ40歳ほど若く、唐の張懷瓘は『書断』で「少きときは則ち虞監（虞世南）を服膺し、長じては則ち右軍（王羲之）を祖述す（若い時は虞世南の書法を大切に守り、成長してからは王羲之の書法にならった）」と述べています。

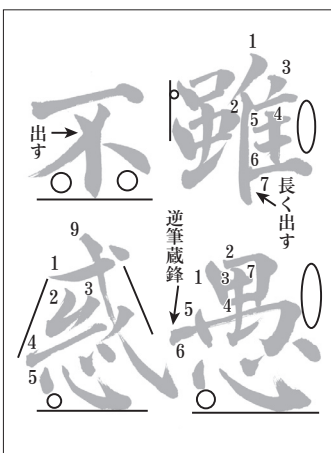
また、褚遂良の父褚亮と欧陽詢とは同僚かつ友人の間柄でした。太宗が「弘文館」という書を好んで学ぶ場を開いた際に、欧陽詢と虞世南が学士として書法を教授したことから、褚遂良が二人から大きな影響を受けたことが見て取れます。実際に褚遂良の書には「隸法（隸書の筆法）」が随所にみられます。それは欧陽詢の書に「隸法」がみられることから、その影響があったのではないかと推察できます。

〈学習上の留意点〉

「雖」：偏の最後の点は書きません。また、「ふるとり」の二画目は下にはっきりと出して、重心を上げましょう。

「愚」：六画目の起筆は五画目より左に出します。心の最終画を右に出して字幅を取ります。

「不」：やや扁平に書き、三画目の起筆は二画目よりも上に出します。



「惑」：「戈」法を長く強調し、抑揚をつけて運筆にリズムを与えます。はねの上部は広く余白を取ります。

高・大・一般 仮名

新(10)級から五段までは作品用紙として画仙紙ハツ切り(68 cm×17.5 cm)又は、画仙紙半切(136 cm×35 cm)のみの出品です。
六段から八段までは作品用紙として従来通り画仙紙半切(136 cm×35 cm)のみの出品です。

加藤 東陽



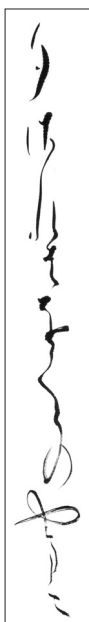
〈釈文〉夕さればをぐらの山になくしかは
こよひはなかず いねにけらしも

〈出典〉万葉集 1511

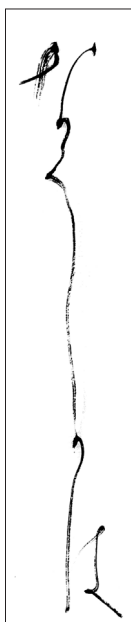
〈歌意〉夕方になるといつも小倉の山に鳴く鹿だが、今夜は鳴かない。どうやら寝てしまったようだなあ。

〈解説〉

三行構成で、文字の大小と連綿線を駆使して行の流れとリズムを強調しています。特に、作品が単調にならないように上部の余白を広く(疎)、下部を狭くして(密)、濃淡潤渴をつけることにより、立体感を意図しました。



「れ者」を短い連綿で書き、行の流れを右下へ導いています。「や万二」の字間を詰めながら、「二」の字形を右下がりに動きを持たせて、二行目への気脈のつながりを持たせています。



渴筆での連綿です。「し」の字姿が単なる棒のようにならないよう、筆を少し傾け緩急のリズムをつけて、「穂先が紙面を切る」ように書



きましよう。

「こよひ」の文字の大小関係と、「那可須」の右下への中心移動がポイントです。



長い連綿ですが、まず落款の位置を考えましよう。次に、一字一字の実画と虚画を念頭に、強弱をつけながら力強く、一気呵成に書きましよう。